

絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践 ～絵本『へんしんトンネル』の世界を楽しむ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

高田 瑠依・田中 美咲・大石 茉依音・
阿志賀 綺愛・関 菜奈美・田島 綾華・
服部 ころこ・古賀 優奈・吉富 茜音・
松村 梨歩・岩下 芹梨奈

題材とした絵本：『へんしんトンネル』

文：あきやま ただし 絵：あきやま ただし 出版：金の星社

タイトル：「へんしんとんねる」

実践準備の担当：プロデューサー（高田 瑠依）、衣装（服部 ころこ）、小道具（大石 茉依音）、音楽（吉富 茜音）、記録・報告書（関 菜奈美）

実践時の担当：かっぱ（松村 梨歩）、馬（田島 綾華）、ロボット（阿志賀 綺愛）ロボットボロボロ（古賀 優奈）、コラの女の子（吉富 茜音）、ラッコ（服部 ころこ）、チョコ（岩下 芹梨奈）、こちょこちょ女の子たち（田中 美咲・高田 瑠依）、お茶（古賀 優奈）、イタリア人（大石 茉依音）、ゴリラ（服部 ころこ）、フクロウ（高田 瑠依）、ナレーション（高田 瑠依・田中 美咲）、音・演奏（吉富 茜音）、カメラ・音響（大石 茉依音・田島 綾華）

1. 題材「へんしんトンネル」選定の理由

私たちのグループは、『へんしんトンネル』の絵本を使い、縦割りの子どもたちを対象にどのように活動するのかを考えた。

絵本を選ぶにあたって初めは、『めっきらもっきらどおんどん』の絵本を選び、内容を考えていたが、なかなか子どもたちの活動を考えるのが難しかった。そこで他のグループも『へんしんトンネル』を選定候補に入れていたが採用しなくなったこともあり選定候補として考えた。『へんしんトンネル』は子どもたちもよく知っている絵本であること、縦割りの3歳から5歳の子どもたちどの年齢でも楽しめること、繰り返しや言葉遊びで物語が進んでいくことから、子どもたちも活動の理解がしやすいことを考え『へんしんトンネル』を使って活動することにした。自分たちで絵本を読み、子どもたちが何をするかを考え、グループで意見を出し合い、トンネルをくぐってへんしんごっこをすることにした。へ



んしんをして動物の動きをしたり、子どもたちと一緒に言葉遊びをしたり、手遊びをしたりすることにした。手遊びは、『へんしんトンネル』につながるようにへんしんする手遊びを考えて子どもたちと手遊びをした。

『へんしんトンネル』の絵本は、繰り返して書かれていることから、次に何が出てくるのかを予想できた子どもたちも多く、反応が良かった。子どもたちも楽しそうに活動する姿があり、私たちも楽しく劇ができた。

(執筆者：大石 茉依音)

2.絵本の世界から遊びへの展開

「へんしんトンネル」の絵本を見たときに、言葉を繰り返すことで違う言葉に聞こえることが私も面白く感じて、子どもたちだったらもっと面白く感じてくれるのでは無いかと考えた。またこのトンネルをくぐったらどうなるか予想したり、自分もくぐってみたいと思い、絵本でもこんなにも面白いから、劇という形でトンネルをくぐるとへんしんしているという場面を見ることで子どもたちも楽しんでくれるのではないかと考え、この絵本に決定した。子どもたちに楽しんでもらうため、絵本に出てきた言葉なども使いつ



つ、自分たちの考えた言葉のへんしんも入れて、子どもたちが楽しみながら学べるように工夫した。例えば、お茶→チャオとしてイタリアの挨拶であることや国旗を作って見せて分かりやすい説明をしたり、時計から毛糸として、毛糸はなにに使われているかのクイズをしたり、ゴリラが出てくる場面ではゴリラの食べるものを紹介したりと、子どもたちが楽しく学べるように意識して遊びの展開を考えた。

(執筆者:服部こころ)

3.実践に際して大切にしたこと

子どもたちと一緒に馬やごりら、ラッコなどさまざまな動物に変化し一緒に遊んだ。室内を使って身体を動かすことで、子どもたちもやって楽しいと思えるようにした。さらに、言葉遊びを子どもたちと一緒に考えた。例えば、ごりらだったらなんの果物が好き？など子どもたちに答えを求めるような声掛けをした。その時にはイラストも一緒に提示することで子ども達にもわかりやすく伝わるように工夫した。次に、園の保育者と短大の教職員にトンネルを作ってもらい私たちと一緒にトンネルに入って楽しんでもらうようにした。子どもたちが楽しそうにトンネルをくぐっていく姿が見られた。最後には私たちと一緒にリズム遊びをした子どもたちが真似して楽しそうに遊んでいる姿を見ることが出来た。

(執筆者：松村梨歩)



4.内容について

(1) 全体の構成

全体の構成としては、大きなトンネルを作りそこを通ると変身した違うものが出てくるという仕組みになっている。トンネルに入っていき人や物を自分たちで書いたり買った服などをテープや、色紙を使ってアレンジした。そして、トンネルを通ったりする際などはカメラを動かしたり、別のカメラに切り替えたりすることで分かりやすくした。物だけの変身したりするだけではなく、子供たちもトンネルをくぐったりラッコの真似、馬の真似などすることで退屈せずに一緒に



なっていて、リハーサルの10分程でおわってしまい、短かったという子供たちの声が多かった。それを踏まえ、本番では、絵本の中に入っていない単語を作ったり、その変身した物の豆知識を付け加えた。さらに、ちゃんぶーの際のボディーパーカッションでは流行りの振り付けなどを加えたり、何回もする事で自分たちも子供たちも楽しく活動することができた。体が温まったように感じられた。

(執筆者：古賀優奈)

(2) 子どもたちとの対話について

子どもたちが反応しやすいような、言葉掛けを行った。たとえば、動物になりきる時に「ラッコさんになってみよう！」や「どんな食べ物を食べるのかな？」と質問を多くして、子どもたちとの会話を多くした。変身する内容に沿った言葉掛けを行った。子どもたちが変身する対象になりきり楽しめるような環境作りをした。子どもたちが楽しいと思えるように、声のトーンを高くしたり、ゆっくり話したり、子どもたちに応じた丁寧な言葉遣いで劇を進めていくことが出来たゆっくり話すことで、子どもたちが理解をして楽しく体を動かしているところを見ることができた。子どもたちが体を動かしたりしている時には、それに合わせた言葉掛けを行い、子どもたちより楽しく体を動かせるようにして言葉掛けを行っていた。

(執筆者：高田瑠依・田中美咲)



(3) 表現の工夫

変身する対象になりきるために洋服の色をその動物や物に合わせて作った。また、それに合わせて例えばかっぱだったら頭にかっぱのお皿を縫い付けてみたり、ぼろぼろのロボットでは洋服にガムテープを貼ったり紙をぐちゃぐちゃにしたものを貼ったりしてぼろぼろになっているように見えるような工夫を行った。また、トンネルは変身する前の人と変身後の人が入れ替わるように大きさの物を準備した。この時のカメラは最初は切り替えるだけであまり変身している感じがなかったが、その動物やものと一緒にカメラを動かすことで、より変身しているように見える工夫を行った。場面の構成は最初は絵本にもでてくるものを行なって子どもたちがそれについて理解出来るように場面を構成した。絵本には出てこないものも出して子どもたちと一緒に楽しんで行うことが出来るように場面の構成を行った。子どもたちがただ見るのではなくて、一緒にトンネルをくぐったりその物や動物に合わせて動きをしたりして体を動かせる工夫を行なった。表現では子どもたちにわかるように大きく動くことで、一緒にその動作を行うことができた。



(執筆者：高田瑠依。田島綾華)

(4) 音と音楽

特に工夫したことは『へんしんトンネル』の見所ぶーちゃんがでてきてみんな感想を言うときににじの曲を選んだところを工夫した。また、最初に『へんしんトンネル』の画面を映しているときに出だしに木琴でポンポンと音を鳴らし、子どもたちが集中して話を聞いてくれるように工夫した。また、トンネルに潜る際には実際には音を変



えて子どもたちが楽しんでもらえるような音響にした。また、元気な音、1人1人が楽しむ音、眠る音、最後のにじの曲など常に同じ曲ではなく色々な曲に変えて子どもたちもわたしたちも楽しめるようにした。そして子どもたちが私たちの真似をするところ、例えばラッコや、保育者にトンネルを作ってもらいトンネルを潜る時でも子どもたちが通る時でも時計時計などとピアノに合わせて言いながら次の毛糸にうつる。などと音と言葉で表現し工夫をした。ピアノと言葉を合わせることで子どもたちにもわかりやすいようにした。

(執筆者：吉富茜音)

(5) プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

プレ幼教こども劇場を通してできている子どももいればできない子ども達の反応をみて、手遊びでは、初めての子も真似できるように2回通した。へんしんトンネルでは、子ども達も一緒に参加できるようにクイズ形式にした。クイズにすると好きな食べ物や次の動物を出すことで子ども達も一緒に参加できる。見るだけでは飽きるので飽きないようにクイズを入



れて子ども達はどんな動物が出てくるか楽しむ姿を見ることができた。また、へんしんするたびに馬やゴリラ、ラッコなどさまざまな動物のまねを一緒にすることで体を動かし参加して楽しいと思えるようにしていた。本番では、子ども達が自ら動いてくれるのを見て楽しんでくれるんだと思った。トンネルを作ってくぐる時も子どもたちは楽しそうにトンネルをくぐりぬけている姿を見ることができた。まねっこ遊びでも、楽しそうにまねっこしている子どもたちを見ることができた。

(執筆者：阿志賀綺愛)

(6) 取り組む過程での改善と工夫

幼教こども劇場1回目のリハーサルを通して大きな課題ができた。それは、30分な行なわなければいけない劇を15分程度で終わってしまったこと。そのため、改善した点や、工夫した点が沢山ある。

1つ目は、へんしんトンネルの物語の前にへんしんする手遊びを入れ、2回繰り返した。手遊びを知らない子が多いと予測し、1回目はゆっくりわかりやすいようにし、2回は子どもたちが流れをわかったのを確認してびをした。

2つ目は、へんしんする登場人物を増やしたり、果物や食べ物のペープサートを作って、これを食べる動物はなんでしょう？などの問題を付け加えたりした。また、お面が見えにくいという指摘があったため、トンネルに入る際、カメラに体を向けたままトンネルに入るなどの工夫をした。カメラの操作などを工夫した。

3つ目は、子どもたちにもトンネルくぐりを楽しんでもらおうと考え現場の保育者の方に手伝って頂いた。保育者の方にトンネルを作って頂き子供たちは私たちと一緒にへんしんする動物の名前を言いながらトンネルをくぐる。

最後に、ぶーちゃんが何匹でできたかみんなで数えたり、ぶーちゃんの名前を真似っ子ゲームをピアノに合わせて行ったりした。ピアノのリズムに合わせて動くのは私たちも難しいと感じるところが多かった。



(執筆者：岩下芹梨奈)

(7) 幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

へんしんトンネルが始まる前には子ども達が興味津々でわくわくしている様子だった。ピアノの音に合わせて手を叩いたりしていた。手遊びの場面では、子ども達が画面を見ながら手遊びを真似していた。へんしんをする場面では『へんしんトンネル』の絵本を知っている子どもが多く、なに



に変身できるのか子どもが予想できていたため、反応がよかった。カップが変身する時には「かっぱ...ぱっかになる」と言って楽しんでた。私たちが「次はどんなのに変身するかな？」と聞くと動物を言ったり分かんないと反応している様子が見られた。

反省点としては、次々に変身していくなかで、より子ども達がわくわくできるように、次は何に変身するのか子ども達が考えられるように、一つひとつの変身の時間を長くすべきだこと。また、らっこの真似やちよちよの真似をする時には子ども達はすぐに真似をして楽しんでたが、友達とのちよちよに夢中で私たちの声が聞こえていなかったのが反省点。子ども達が興味をひくような声掛けをすべきだった。子ども達もトンネルをくぐる場面では、先生方にも上手く伝わってなかったのが反省点。トンネルをくぐるのにワクワクしており、私たちの声が聞こえていない部分があった。これも同様に子ども達の興味をひくような声掛けをすべきだった。ちゃんぶーの真似では画面を見ながらリズムに合わせて身体を動かして子ども達も笑顔で楽しんでいる様子が見られた。「まだしたい。もう1回したい」という声もあり、楽しんでもらえてよかった。子ども達が教室に帰るときも「へんしんトンネルごっこしたい」と言っている様子が見られて良かった。

(執筆者：関菜奈美)

5. 取り組みを通して学んだこと、得たこと

【吉富茜音】

今回、幼教こども劇場をやってみて1日目と2日目と園が違うため、子ども達1人1人の反応が違ったり、『へんしんトンネル』の絵本を知っている子、知らない子がいる中でどのようにしたら楽しめるのかなどを考えた。子ども劇場を通しての最大の学びでは自分たちが考えている以上に子どもたちに伝わりにくいところがたくさんあると感じたことだ。「これを真似してね。」などというときに、これがどれかわからないため、「ここをこのようにして真似してね。立ってみよう。」など1つ1つ言わないと子ども達には全く伝わらないことに気づいた。準備の過程では子ども達にわかりやすいようにゴリラのお面を被ったりゴリラの食べ物はバナナなどの画用紙を作ったりして準備をしていて「これを食べている動物は何か？」など子ども達に考えてもらうような形を準備していた。実際の子供達は「ゴリラ！」などと反応してくれて準備としてはとてもよかったのではないかと思った。ちゃんぶーの際にはまねっこ遊びなどをしてとても楽しそうに子ども達がしてくれていたのがよかった。

【松村梨歩】

幼教子ども劇場にあたって、班の人達それぞれ本を持ちよって決めた。最初は、「めっきらもっきらどおんどん」をする予定だった。しかし、それを劇で表現したり子どもたちとのあそびを考えたりする中で難しくなっていた。そのため、もう1度選定を考え直すことにした。私たちのグループは縦割りだったのもあり「へんしんトンネル」にした。「へんしんトンネル」は子どもたちに知られている絵本でもあるため子どもたちと一緒に楽しめると思ったから。さらに、言葉遊びや真似っ子遊びをすることで楽しんでいる姿が見られた。「へんしんトンネル」にしたことによって劇の内容や子どもたちとの遊びも考えることができた。言葉遊びを通して遊ぶことになった。どんな言葉遊びにするかわかりやすいような言葉遊びを考えたりその場で子どもたちも動けるように同じ動物になって保育室を散歩したりと工夫した。また、私たちはトンネルを使ってへんしんするため子どもたちも一緒にへんしんしようと思って先生方や短大の教職員に手伝ってもらいトンネルを作って遊びの展開を考えた。プレ教子ども劇場で実施した際、時間配分を考えておらずはやくおわってしまった。そのため、1週間後の本番に向けて練習を重ねたり追加する部分があったが本番では時間配分も上手いき子どもも楽しそうに言葉遊びを楽しんだり一緒に身体を動かして動物になりきって遊ぶ姿がみられた。私達も準備をしてみんなが全員楽しく終えることが出来た。

【岩下芹梨奈】

この幼教子ども劇場やってみて、オンラインだったため、音声途切れするなかくかったりするなかで、子どもたちと、どうしたら一緒に楽しめるのかを、工夫することがとても難しかった。まず、聞こえにくいという点の解決策としては、子どもたちに「聞こえたら、まるを作って教えてね。」と伝え、言葉だけじゃなく、ジェスチャーも使う事で、より伝わりやすくなるよう工夫した。また、子どもたちと一緒に楽しむために、実際に子どもたちも、声に出して動いたり、動物の真似っ子遊びやクイズを取り入れた。そのなかでもクイズの回答が、私たちが予想していなかったような回答もあり、面白いなと感じるところがあった。子どもたちも、真似っ子遊びやクイズをしたことで、とても楽しんでいたように感じた。この幼教子ども劇場を通して、保育者の声のかけ方により、子どもたちの行動や態度が変わるということがわかった。そのため、常に子どもたちを気にかけて、どのように声をかけるか考えながら一人ひとり接していきたいと思った。

【服部こころ】

劇を1から作ることが初めてだったので、わからないことだらけだったけれど、みんなで協力して本を選ぶところから始めた。最初は『めっきらもっきらどーんどん』と言う本を採用しようとしていたけれど、ストーリーを考えるとなかなか先に進めなかったり、どこを遊びにつなげたらいいかわからなかったりして『へんしんトンネル』に変えた。『へんしんトンネル』はみんなアイデアがたくさん出てきて本によっても、劇に向いている本と劇にするには難しい本などがあるんだと思った。準備をしていく中でうまくトンネルが作れなかったり、頭の中では劇がうまくいくはずだったのに、なかなか流れがわからず、通してみると上手くできていなかったりして大変な思いもした。しかし、子供たちが劇を見て喜んでいる姿や楽しそうにしている姿を見るとやってよかったなあと思った。就職してから劇を作る時はこの体験を糧にして頑張っていきたいと思った。みんなで協力することの大切さを学ぶことができた。

【田島綾華】

最初のプレ幼教子ども劇場ではどこの班よりも早くおわってしまった。また、プレを通してもっと子ども達と一緒に楽しんで行っていくことができるのかと考えながら構成を作るのはとて

も難しかった。この経験を通して得た最大の学びは、こどもたちにどのようにしたら説明が伝わるのか、表現の仕方や構成の仕方によって変わることだ。まず、オンラインということでもどもたちに伝わっているのか分からないため、伝わっていったら丸ってというジェスチャーをしてもらうことで伝わっているのか分かるように工夫を行った。また、最初から変身する物がでくるのではなくクイズを行ってなにがでくるのか一緒に考えたり、その物や動物の動きを行ってこどもたちが体を使った遊びを入れたり、園の保育者や短大の教員にも手伝って頂き実際にトンネルを一緒にくぐってみたりなど、こどもたちの様々な様子や表現を見ることができた。このことを通して子どもたちへの言葉かけ方によって子どもたちの表現や行動などが変わってくるのがわかった。こどもたちのことを常に1番に考えて言葉かけを行って行くことが大切だということを学ぶことができた。

【高田瑠依】

幼教子ども劇場を終えて、自分自身を大きく成長させることが出来た。劇を作ることは自分たちにとって初めてだった。絵本を選びオリジナルのセリフを考えたり、絵本のそのままの言葉を使ったり、それをどうアレンジしセリフらしくしていくのかを考えていくことが出来た。私は、ナレーションを担当した。ナレーションをすることも初めてで、最初は読むだけ、子どもたちの反応を見て言葉掛けをしていくだけ、と簡単に捉えていた。だが、本番に向けて準備を進めていくにあたって、ナレーションとしての大変さや難しさを実感した。セリフを考えることがそう簡単ではないことを知った。子どもの反応を見てアドリブで言えば大丈夫、という考えだったが、様々な場面の中で学んだことがたくさんあった。ナレーションをしていて、子どもたちの反応がどのようなものなのか、私たちの劇を通して子どもたちにどのように伝わっているのか、私たちの言葉掛けが子どもたちをどのように動かしているのか、子どもたちの変動を楽しみつつ、学びを深めて行くことが出来た。私たちが、質問をして子どもたちが答える時、私たちが否定をするのではなく、ありのままの答えを自由に発想したくさん口に出して相手に伝える子どもたちの姿があってこそ劇が成り立っているのだということを知ることが出来た。最初は、オンラインで劇をして子どもたちに伝わるのか、子どもたちはきちんと劇を理解出来るのか、私たちが伝えたいことが子どもたちに対してきちんと伝わるのか、など不安ばかりだった。しかし、それはオンラインだからなのではなく、1番に何を伝えたいのか、子どもたちにどんな場面で楽しんでもらいたいのかを、私たちがきちんと把握し、それを理解し子どもたちに伝えていくことで、オンラインでの劇が成り立っていくのだと感じた。今回の幼教子ども劇場を通して、自分が知らなかったこと、分からなかったこと、不安だったところを学び、理解し保育者として必要な実力を身につけることが出来たと思う。まだまだ自分に足りないところを、いい方向に持っていきといいのかを勉強し、自分のものにしていきたい。

【関菜奈美】

幼教子ども劇場を通して学んだことは、オンラインだったため、どのようにすれば子ども達に上手く伝わるのか、子ども達の反応を予想すること、臨機応変に対応することの大切さだ。オンラインだったので機械トラブルなので声が聞こえなかったり、私たちの説明が上手く伝わらなかつたりし苦戦した。どのようにすれば子ども達に伝わるのか考え、「準備できたら大きくまるをつくってね」など声掛けをし、ジェスチャーをすることで子ども達に伝わりやすくなった。へんしんをする場面では画面を見るだけでなく子ども達が楽しめ、飽きないように馬やらっこ、こちょこちょなどの真似をして身体を動かし友達と一緒に楽しめるような工夫をした。次は何が出てくるのかクイズをしたりすることで子ども達も何が出てくるか予想してワクワクしている様子だった。子ども達も変身してトンネルをくぐるために園の保育者と園を訪問している短大教員に協力してもらい一緒に変身した。子ども達が変身する前に友達同士で楽しそうに話している様子が見れた。その際に子ども達に声が聞こえなかったり、伝わりづらいつと思った。声掛けの仕方により子どもの行動が変わると思ったので、子ども達の反応が予想と違っても臨機応変に対応していくことの大切さを学んだ。

【田中美咲】

幼教こども劇場をやって子どもたちが楽しむためにはどんなことをするのがいいのかを考えることができた。園によって子どもたちの反応が違ったり、年齢によっても反応が全然ちがうため、いろんな子どもの様子を見ることができた。私はナレーションを担当したが、すごく難しく感じた。子どもたちには丁寧な言葉遣いをしなければいけないため、そこは意識して話すようにした。また、子どもたちの反応を見ながらアドリブで話したりしなければいけなかったのでそこも難しかった。しかし、子どもたちとたくさん関わることができたと思うのでそこは良かったなと思った。絵本を『へんしんトンネル』に変えたことで衣装を動物に合わせるなど、子どもたちが分かるようにしたのも良かったと思った。1回目と2回目は同じ内容を実施したが、子どもたちの反応も異なり、自分たちも1回目より2回目の方が、気持ち的に楽しめたのかなと思った。全体をふりかえって、今までの実習で学んだことなどを活かしながら子どもたちが楽しめる活動を考えられたのでよかった。この経験をこれから先も活かしていけるようにしたい。

【阿志賀綺愛】

幼教こども劇場をやってみて、子ども達がどうやって楽しんでもらえるか1から自分たちで考えて、一緒に楽しめるように工夫することが難しかった。最初のリハーサルでは時間が短くなったりしてどうしたらいいか話し合ったりしてクイズや手遊び、子ども達への言葉掛けを増やしたりした。

オンラインだったため途切れたり、聞こえづらかったりして大丈夫か心配だったが一緒に楽しむことができてとても良かった。またまねっこ遊びでは、子ども達と楽しむことができた。子ども達は、予想外の答えを出してきたりしてとても面白かった。

この幼教こども劇場を通して、保育者の声かけによって、子ども達が楽しめるように工夫することが大切だと思った。オンラインだからより子ども達を気にかけることを意識した。どのように声かけしたらいいか一人ひとり考えることが大切だとわかった。

【大石茉依音】

幼教こども劇場をするにあたって、グループで協力して1から劇の内容を考え、出てくる登場人物の役割を決めて、自分が担当する役割や、作るものを考え、みんなで協力することができた。

最初のプレでは、他のグループよりも早く終わってしまい、構成の組み立てを作る大変さを学ぶことができた。子どもたちと関わっていくなかで、保育者の言葉掛け一つ一つで子どもたちの行動や表情が変わるため、言葉かけがとても重要だということを知った。また、オンラインだったので本当に伝わっているのかわからないため、ジェスチャーで丸を表現してもらい伝わっているのかを工夫することができた。また、ただ見るだけではなく、クイズを行ったり体を使ったりすることで、子どもたちが暇を作ることなく、また子どもたちと一緒に楽しく行うことができたと考える。子どもたちの反応が違ったりしたときにも臨機応変に対応することができたので、良かった。今回の実践を通して、子どもたちが楽しく活動をしているところを見ることができたので良かった、また、自分たちも楽しくできたのでよかった。この経験を次に活かして行きたい。

【古賀優奈】

幼教こども劇場を実際に行ってみて、去年、先輩方の劇を見た際、オンラインなので通信が悪かったり声が途切れたり子どもたちとのコミュニケーションを取る事がとても難しそうだった。それを踏まえた上で、しっかり子どもたちに「聞こえたら声ではなく身体を使って大きく丸をしてみてね」などの声掛けが必要だと感じた。この事を実践すると、子どもたちに問いかけると必然的に体を使って大きな丸をしてくれていた。

他としては、勝手に変身するのではなくクイズ形式でしていくと子どもたちと一緒に劇に参加できる良い案だと思った。ちゃんぶーのボディーパーカッションも初めは1回しかする予定が無かったが、予想以上に子どもたちの反応が良く2回もした。振りをあまり考えてはなく、アドリブで難しかったがもっとしたいと子どもたちが言っていてとても嬉しかった。全体を通して思ったことは、初めは違う絵本を考えていたが急遽変えて1から制作したり台本をしたりするのはとても大変だったけど、自分たちの中ではとても良い出来だと感じた。

